木下杢太郎全集

第四巻

木下杢太郎全集 第四巻　第六回配本（全二十四巻）

一九八一年十月一九日　発行

定価 三七〇〇円

著者　太田正雄

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁五一五
株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六一二六二四〇

印刷・三秀舎　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 太田元吉 1981　Printed in Japan

目次

柏屋傳右衞門……一
增補 天草四郎……一〇一
花曇遠唄聲……一五九
硝子問屋……一九七
代議士の家……二二一
空地裏の殺人……二八一
常長……三一九
訴人……三三九
柳屋……三六三

わらひ草……三八九
《參考》天草四郎と山田右衞門作（習作）……四一三
後　記……四四一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

柏屋傳右衞門

（社會劇三幕十場）

時　代

明治二十二年頃

場　所

東京近國の港

人　物

北村傳右衛門（柏屋主人、六十二歳）

同　きの（其妻、五十四歳）

長森きく（長女、三十三歳）

北村廣吉（長男、二十八歳）

同　京次（次男、二十七歳）

同　時三郎（三男、十五歳）

後藤亮吉（二十七歳）

田村あい（五十六歳）

同　るん（二十一歳）

伊勢崎しげ（若狭屋次女、二十五歳）

沼西洪庵（醫師、五十八歳）
笹屋主人（六十歳）
鈴木屋主人（五十七歳）
德右衞門（六十歳）
春　雪（二十三歳）
其他

場面

第一幕第一場　柏屋前街道
同　第二場　同　土藏內
同　第三場　同　店先
第二幕第一場　街道の四辻
同　第二場　柏屋中の座敷
同　第三場　同　裏庭
第三幕第一場　同　店先
同　第二場　鈴木屋の湯殿
同　第三場　柏屋土藏內
同　第四場　同　前の街道

注意　この戯曲の基礎なるべき情調は、都會よりやや離れる浦曲に於ける、徳川末期の文化を殘したる寛濶安逸なる社會情調にして、後ちに耶蘇教の思想が併せ齎らしたるロマンチツクの西洋趣味竝に其情調は、靜なる湖に入る河水の如く、之に混じて波瀾を起すものとす。

第一幕

第一場

十月の午後。薄日影。

河口に近き街道の一部。中央より左りに寄りて、二階造りの商家の入口、それより右は黒塀になり居りて、木戸の隙より内の庭の木立など見える。低き屋根の後ろには高き船の檣ありて、大きなる河のあることを暗示して居る。

塀の前には隣家の娵、道端に蓆を敷きその上にて機絲を調べてゐ、そのそばには子を背負ひし女の子古風の子守唄を唄つて居る。

おあい、その娘おるん。おあいは日傘、おるんは蝙蝠傘をさして海岸(右手)の方より來る。同じ船にて來りしとおぼしき毛布を著、蝙蝠傘を杖にしたる男と連れ立ちて來る。

風俗すべて三代廣重乃至芳年等が東京名所圖繪に見る人物に準ず。

旅の人　それならここが柏屋で御座ります。さよなら御別れ申しませう。

おあい　いや、船ではいかいお世話さまになりました。それならば御免下さいまし。

おるん　さよなら、御機嫌よろしう。

おあい　（立ち止りて）まあまあ、ここが柏屋だつてねえ。暫く見ないうちに此土地も大層變つたこと。煉瓦の建物が出來たり、銀行が立つたりしてゐるねえ。この前わたしの來た時は、ほんに寂しい漁夫町で、何でもこの邊に竹藪があつて、河の縁に葦が一ぱい繁つて居つたやうに覺えて居るが。是も文明開化のお蔭だねえ。

おるん　さうでしたかねえ。まあ、おつ母さん、私はあの時は幾つでしたでせうねえ。

おあい　私が大病を病んだ翌くる年だから、お前は九つの時だつたよ。

廣吉　（陰鬱なる顏に鬚あり。髮長く、黑無地の着物を着てゐる。柏屋より出で、街道に來かかる。）

青年　（急ぎ左手より來る）先生。先生。

廣吉　（後ろを振り向く）おお、川口君。

青年　いよいよ明後日の晩に討論と云ふことに決りました。圓乘寺の本堂にしようと云ふのですけれども、それでは我々に不利益でせうね。

廣吉　所などは何處でも可い。何なら道の四辻でも可い。

青年　僕等の仲間はみんな興奮して居ますよ。（二人の男過ぎ去る）

おあい　（廣吉に摺れ違ひさま、あ、廣さん。と云はんと欲し、機を失して止めたる風をする。廣吉等の過ぎ去るを見送りて、おるんに）あれが廣さんと言ふ人だよ。御覽、お前、隨分妙な態をして居るぢやないかえ。

おるん　まああんな人ですかねえ。

おあい　そりあね、柏屋のお父さんの子は、一人死んで、皆で今四人あるが、一人々々氣象が違つて居るよ。お菊さんて人が一番總領で、後家さんを通して居るよ。もう三十二三だらうね。その次が今の廣さんで、耶蘇教なんだよ。そして京さんね。この人は道樂者だよ。一番下のは時さんて、まだ子供だつた。みんな變つた兄弟だよ。ま、まだ船頭衆は來ないかねえ。

おるん　なぜおつ母さんは立つて御出でになるのです。

おあい　ま、お待ちよ。隨分になるね。前來た時からは。御覽よ、家なども普請しなほしたのだね。

時三郎　（陰氣なる顏をしたる少年。寂しさうに家から出てくる）

おあい　あの子は屹度時さんだね。（傍に寄りて）お前さん、時ちやんぢやないの。

時三郎　（默つて居る）

おあい　お前さんこの叔母さんを忘れたの。

時三郎　（小學校生徒らしくお辭儀をして）相模のをばさんですか。をばさんが事によると今日の船で

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

來るかも知れないから、濱へ見に行けと姉さんが云ふから、行かうともつてゐたとこです。

おあい　おや、まあ、さうかい。御苦勞だつたねえ。

時三郎　（急に驅けて家の内に入る）

（家の中からおきく、亮吉出て來る。）

おきく　（おあいを街道に迎へて）まあ叔母さん、お早う御座いましたねえ。さ、どうぞお入（はひ）んなさいまし。今見せにやらうと思つて居たところでしたに。ま、其後は。お變りも御座いませんでしたか。

（皆々よろしく挨拶する。）

船頭二人　（大きな荷物を持ち來る）

おきく　あ、船頭衆御苦勞だつたね。家（うち）へ運んで置いておくれ。さあ、をばさん、寒う御座います。早くおはいんなさいまし。まあ、おるんさん。お前さんは大きくなつたねえ、まるで見違（みちが）へてしまひますよ。いくつでしたねえ。

おるん　（恥ぢらひたる態）

おあい　もう二十一になりますよ。

おきく　まあ、ねえ、二十一。へえ、まあそんなになりますかね。私やまだ十八か九だよと思つて

ました。（急に氣が付いて）まあおりきさん。あんたは毎日よく精が出ますね。この寒いのに。

機絲を調ぶる女　へえ、お寒う御座います。何少しばかり。

おきく　相模のをばさんが來ましたから、あとであなたも遊びにお出でなさい。

機絲を調ぶる女　ありがたう御座います。

亮吉　（話の間に、私に凝っとおるんの顏を見てゐる）

おるん　（眸を轉じ、亮吉を見る）

亮吉　（他所を向く）

おるん　（眸を動かし、聊か輕蔑の表情をする）

亮吉　（同じく其顏に人わるさうな微笑を漂はしてゐる）

（皆々家の内に入る。暖簾の中に人のさざめく聲聞える。）

機絲を調ぶる女　まあ、あれが相模のをばさんて人ですってねえ。

通行の女　（柏屋より物を買ひ來り、暫く立止まりて人々を見てゐたが）道理で、何處かに見覺えのある顏だと思った。へえ、さうですかえ。隨分な女ださうださうだが……（人惡るげに）またいまに柏屋へ騒動を起して行きますよ。あの人の行くところに騒動の起らないことはない女だ。一旦人の所へ嫁に行ってそこを出て、それから深川で藝者をしたり洋妾（らしゃめん）になったり、到頭しまひには

根津で華魁をしてゐるのを、相模の大盡にひかれてそこのかみさんになつたのでさあ。もと十年許り前にこの土地へ來た時にはそりや大した勢で金びらを切つたもんさ、それで相模の家もすつかりいけなくしたつてね。柏屋の大おかみさんの義理の姉さんですよ。

機絲を調ぶる女　それにしては隨分若く見えるやうですね。

通行の女　ほんにまだ四十を出るか出ない位に見せてゐますね。

機絲を調ぶる女　おや、もう日が陰り出した。

通行の女　ま、それぢや貴方ももうおしまひなさいまし。よくまあ、そんなに精が出ますねえ。

（亮吉と京次と連れ立つて來る。亮吉は前懸けをしめてゐる。一寸愛嬌のある顏、京次は病身らしいかつぷくにて、青白く美しい顏をしてゐる。用のない人のやうな身態、著附。）

亮吉　京さん、御覽？

京次　ふむ。

亮吉　ちよつと別嬪だねえ。

京次　かも知れない。

亮吉　あのをばさんの子にしちや上出來な部だよ。

京次　さてな。

亮吉　然しかなりもう人を食つてゐるね。

京次　さうありさうなものだ。

亮吉　また君は今夜もあすこかい。

京次　家なんぞに居て、人に挨拶するなあ面倒臭いからな。

亮吉　（小指を出して）魚を捜しにやらされるんだよ。ちえ、五十集の代りまでしなけりやならないのさ。ちよつと然し一芝居打つて見たいやうな氣もするよ。

京次　馬鹿々々しい。

（兩人右手に消える。）

——幕——

第二場

十月の夷講の夜のこと。

柏屋の奥の土藏を主人の居間に直したる室。陰氣なる狹き間にて、後ろは店に通ずる觀音開の戸になつてゐる。右手に六枚折を立て、老主人はその蔭に寢て居て、觀客席よりは見えず。暗き行燈中央にあり、その下に種々の本澤山取散してある。それより左手に大きなる藥罐を懸けたる長火鉢あり、老いたる妻おきのしよんぼりと坐つてゐる。

向うの隅に時三郎うつむいて新聞を讀んでゐる。一體に沈鬱なる氣分。

傳右衞門　（聲だけして姿は見えず）なんだつて云つてあんなに騒ぐだらう。また亮だらう。あんな馬鹿騒ぎをするのは。

おきの　今夜はうつちやつてお置きなさいましよ。夷講ですもの。近頃は貴方が御病氣だから皆遠慮をして居るのですよ。偶だから好う御座いますわ。

傳右衞門　爲やうがない人達だ。（少時沈默の後、今までとは全くうち變りたる音調にて）寂しい。おれは早く死にたい。

（間。）

（大きなる聲にて金ぴら船々といふ唄始まる。尋いで人の跫音。やですやう、私は。などといふ女のけたたましい聲。また歌。わつといふ人々の高笑。）

おきの　時や。お前ちよつと行つて、默つて座敷を覗いてお出で。もし若狹屋のをばさんが居たら、ちよつと來ておくんなさいとお云ひ。

時三郎　（默つて立つてゆく）

（間。）

傳右衞門　おれも何だか死ぬ期が近くなつたやうに思ふよ。それだから生きてゐる間に、亮に、おれがあれの本當の父親だと云ふこと丈を知らしてやりたいと思ふ。

おきの　およしなさいましよ、今更。もうさうしないでも萬事巧く行つてゐるぢやありませんか。教へりや却つていろいろの面倒が起りますよ。

傳右衞門　面倒は起るかも知れない。だが起つたら起つたで仕方がない。おれはどうも嘘をついたなりで死んでしまふのは厭だ。おれはもう近頃は毎日々々いろんな事を考へる。何だかおれは罪業といふものが恐ろしくなり出してたまらない。

（間。）

おきの　およしなさいましよ。くよくよ物を考へるのは。それより今夜は丁度姉さんも、鈴木屋の旦那も居るから、姉さんに三味線を彈かして、鈴木屋に端唄でも唄つて貰ひませう。

傳右衞門　ああ云ふ音曲類を聽いてもおれはもう些とも面白くない。おれがあんなものを好いたために到頭京を道樂者にしてしまつた。あれを叱りながらも、一部はおれに罪があると思ふのだよ。

おきの　（陰氣な顏をして考へてゐる）

傳右衞門　おれは、萬一にも病氣が直つたら、是非美濃へ往かうと思ふよ。圓乘寺の宗哲さんなぞは深い學問がない。虎溪山にはおれの舊の兄弟子が居て、今ぢや一かどの智識になつてゐる。

——（低く）おれもあのまま、ずつと山に居たら、もう立派に智識になつて居たらうに。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.